

『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』 試訳 (四)

北 館 佳 史

本稿は『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』の試訳である。今回訳出したのは前回の続きにあたる第2巻の27章から55章までである。

翻訳の底本としてはオブランの校訂版 (Aubrun, M., ed., *Vie de saint Étienne d'Obazine*, Clermont-Ferrand, 1970) を使用し、章と段落の構成は同書に従った。現代語訳としてはオブランの同書の仏訳とペピンの英訳 (*The Lives of Monastic Reformers, 1: Robert of La Chaise-Dieu and Stephen of Obazine*, trans. H. Feiss, M. O'Brien & R. Pepin, Collegeville, 2010, pp. 129-255) を参照した。

聖書引用は『新共同訳聖書』に依るが、文脈に合わせて一部変更を加えた。

27. 残虐な迫害があったとき、この野蛮な者たちはこの地方全体を縦横に荒らし、農民たちは彼らを逃れて妻子や家畜を連れて私たちの修道院を探し求めてきた。私たちがほとんど出入りできなくなるほど中も外も溢れかえった。そのため、私たちは必要に強いられ、慈悲に駆られて、彼らを拒まなかったばかりでなく、支援し、見つけられるだけの食料を惜しまずに提供した。とうとう、ある土曜日に、多くのパンを与え過ぎて翌日のためにほとんど何も残っていなかったのが、通常の慣習に反して主日に料理をすることが決められた。ところが、朝になると、大量のパンが貯蔵庫で発見されたので、私たちの全共同体にとって、そしてもしすべてを受け取るならば、難民と貧民にとってもいつもの秤で十分なだけの量があった。

しかし、私たちと彼らの間で分けようとしたとき、天上の助言により、ちょうど必要な量なので彼らがすべてを受け取り、私たちは用意された二つの皿で満足するのがよいように思われた。すべてのパンが新たに門前に運ばれ、一つも残ることはなかった。

3時課の後に再びパン焼き場に入り、大量のパンを見つけ、当時は120人以上であった共同体の全員が1リーヴル半のパンを慣習に従って受け取った。聖霊降臨祭から8日目なので、多くの人々が聖体拝領のために集まったのである。

慈善が行われるとほとんど何も残っていなかったのに、朝になるとそこからすべての人が十分に食べ、さらに多くが残ることがたびたびあったのを私たちは目撃した。

パン焼き係が何度か私に語ったことによると、上で述べた飢饉の際に、かろうじて1週間分と見積もられた穀物が2カ月間持ちこたえ、十分に供給された。外部から穀物が増やされたり、食べる人の数が減らされたりすることはなかったのにである。

マルテルの貯蔵庫にはドルドーニュ川の向う側に位置するいくつかのグランギアからの穀物が保存され¹⁾、建設や飢饉の際には穀物が動物とともにそこから修道院に運ばれた。数日後あるいは数週間後に、何も残っていないと思われたときに、穀物が長い間持ちこたえていることに皆が驚いた。運んでいた兄弟が問い質され、穀物を運び始めたときから少しも減らなかったと答えた。それで、この兄弟はこの穀物を再び量るように命じられた。そのようにすると、与え主はお怒りになり、贈り物が不足し、すぐになくなってしまった。

私たちがこのような話をしたのは、こうしたことが今いる私たちを通じて、あるいは私たちのためになされたからではなく、私たちの間だけではなく多くの他の場所で驚くべき業をなされる御方の功德と力によってなされたからである。

28. 最近兄弟たちから次のような話を聞いた。上で述べた災難が生じたところの近くのいくつかのグランギアで兄弟たちは自らに用意したパンを逃亡してきた貧民、囚人、難民に寛大に提供した。その時、いつもは4、5日分の焼いたパンが、いつもと違ってとても多くの部分に分けられたのにもかかわらず、十分な量あった。報いる神はこの寛大さに対して将来だけでなく現在もお返しになった。何度も提供された物も、提供した人の数も減らなかつたからである。この野蛮な者たちは聖堂を略奪し、祭壇を奪い去り、壊れた聖杯を袋に隠し、豚のように恥ずべき汚れた手で聖所に触れ、財産と衣服を奪われた司祭たちを縛って連れていき、身代金のためにひどい苦しみに陥れた。このように振る舞った野蛮な連中は私たちの修道院を通過し、彼らの面前から逃げ出した人と役畜と家畜で溢れる庭に気付いたが、私たちの物を奪わなかつただけではなく、避難した者たちの物にも手を触れようとしなかつた。彼らは私たちの聖性にではなく、神の力と聖人の功德と力に恐れおののいた。しかし、これらのことは聖人の死後に私たちに、あるいは私たちの地域に起こったことなので、彼が存命し、活動していたときになされた事柄に話を戻そう。

29. この頃、信心深く敬虔な門番が修道院を壁で囲っていた。この場所に巨大な岩の塊がそびえ立ち、四方で地面に接し、山のような外観を呈していた。壁はこの場所を通ることになっており、ここを逸れることはできないので、この門番と仲間たちは何日も岩を砕こうとしたが、徒労に終わった。砕くことができないばかりでなく、多くの槌を壊してしまった。

たまたま神の人が人と会う約束のために向かう途中にこの場所を通りかかった。確信に満ちた門番は馬の手綱をすぐにつかみ、地面に降りるようをお願いではなく命じた。

それで、聖人は少し微笑み、急いで馬から地面に降りた。門番の大胆な確信に驚いて、まるで囚われたかのように何を自分にしてほしいのかを尋ねた。門番は槌を取り、相手の手に渡し、岩の上まで登り、槌で石を叩く

ように命じた。聖人はこのようにして石を3度叩いた。門番は槌を取り戻して、「もう十分です。お幸せにご自分の道をお進みください」と言った。聖人は別れの挨拶を述べ、彼を祝福し、始めた旅を終えた。

彼が出発すると、尊敬すべき門番は、人夫たちを呼び集め、この岩を切るのではなく完全に壊し始めた。彼らはたやすくこの岩を、言わば、根こそぎ打ち砕いたので、夕方には壊すべきものは何も残っていなかった。以前は鉄よりも硬かった岩は、今や大麦パンと同じぐらい砕きやすかった。彼らはその断片を大いに積み上げて、壁の大部分を建設した。聖人の力と門番の信心によってこのことがなされたのは疑いのないことである。

30. あるグランギアがドルドーニュ川沿いにある。これはかつて修道院にするために建設されたが、その後、子供の教育のために設立された。

この施設が教会の右側に建設されているときに、別の場所について述べたように、岩が山のようにそびえ立ち、この場所の大部分を占めていた。回廊が同様につくられなければならないので、兄弟たちはできる限り岩を槌で砕いて平らにし、地面の高さにしようと努めたが、岩が非常に大きく硬いために無駄なようだった。

それで、聖堂が建設されると、この場所の長が修道院長のところへ行き、この岩についてどのようにしたらよいのか、また、回廊は反対側、つまり左側に建設すべきかどうかを尋ねた。それでは不都合だったので、岩の側に溝を深く掘り、皆で押してそこに埋めるように命じた。

所長には不可能であるように思えたが、命令を受け入れた。反論する勇気がなかったので、この場所に戻り、院長の命令に従って、岩の側に非常に深い溝を掘った。それから、この場所からだけでなく、近隣の村からも皆が集まり、全力を出して肩と梃子でこの岩を押しした。まるで山を動かそうとしているように思えたので、多くの者は笑って、困難というより不可能なことをしようなんて正気の沙汰ではないと言いつつ。

こうして作業を放棄して、皆が自分のところに戻った。しかし、聖人が

やってきて、不従順だと言って彼らを非難できないように、溝を証拠として残しておいた。数日後に訪れ、溝がそのままであるのを見て、祈った後に所長と兄弟たちを呼び、腹を立てて、なぜ岩をそのままに残し、自分が命じたように地面に埋めなかったのかを尋ねた。彼らは行ったことをすべて話し、いかに至るところから多くの人々が集まって押しても動かせなかったのかを報告した。すると、彼らを非難して、「私の者たちとそこに住む兄弟たちだけを呼びなさい。あなたがたが言うように不可能だからではなく、あなたがたの不信のため、神ではなく人への信頼のために岩が動かせなかったことがわかるでしょう」と言った。

このようにすると、神の人は十字を切り、「主の名において」といつものように叫んだ。彼が他の人々と一緒に押すと、岩は非常に速く動き、一瞬のうちに難なく溝に落ちた²⁾。

この後に、回廊が他の建物と同様に神の人が願ったように建設された。

31. 上で述べたマルテルでは壁の外に建物がある³⁾。これはオバジーヌの兄弟たちの用途に充てられ、必需品の購入と売却のために有益に運営された。この建物にかつてエティエンヌ師が何かの問題を解決しに来た。この時、この建物を管理していた兄弟が、パンや木材や水に多くを支出し、修道院の共同の必需品を入手できないと不平を言い始めた。

それから、聖なる人は、苦情が理にあって示されたので、ある人々がするように聞かないふりをせずに、どのように全員の必需品を適切に提供するかを黙って考えた。パンと木材に関しては、これらを有利に手に入れられるように、近くのグランギアの一つを兄弟に指定してすぐに望みを叶えた。一方、水に関してはまだ気にかけていたので、建物の脇の門の前に出掛け、水が都合よく入手できるふさわしい場所を見つけた。この地方では泉の音は聞こえたが、見ることはできなかった。祈った後に、周りの人々にそこを掘るように命じた。彼自身がこれを最初に始め、より深く掘り進むと、流水を発見した。そのため、非常に喜び、そこに井戸をつくった。

その井戸は現在まで残っている。

32. ある時、記憶されるべき父がまたサン・ミシエルの城塞の近くにあるグランギアの一つにやってきた⁴⁾。そこで兄弟たちと話しているときに遠くに目をやると、男たちが大いに苦勞して水を運んでいるのを見た。すぐに兄弟たちのほうを向き、近くに泉があるのに、なぜ遠くから水を運んでいるのかを尋ねた。「主よ、この泉の水は実にあらゆる用途に適しています。ですが、この水でスープや他の物を料理できませんし、これまで聞いた限りではかつてもできなかったそうです」と彼らは言った。それで、彼は非常に驚き、この水に腹を立てたかのように泉へ行った。そこで手を水の下に置いて祈った後に水を祝福した。それから、兄弟たちを呼び、すぐに水を汲み出し、鍋に注ぐように命じ、今後この水は料理に使えるようになるだろうと忠告した。

このようにすると、この時からこの水は聖人の命令に従ったので、この土地では現在まで料理用だけでなく飲料用としてこれ以上に適した水はない。

33. カオール地方のタルヌ川から遠くないところに、修道院にするつもりで施設が建てられた。そこで数人の修道士が助修士とともに生活していた。この場所は乾燥して水が乏しかったので、兄弟たちはふさわしい場所に必要な分を使用するための井戸を掘った。深く掘り進み、40ピエ以上に達すると、深く掘れば掘るほどますます乾いて水気のない土を掘り出すことになった。それで、徒勞感に襲われて、彼らはこの作業を完全に放棄して、人夫たちを別の仕事に送った。

この間に共通の父であるエティエンヌはこの場所を訪れることを決めた。3日間の旅を終え、4日目の主日の第4時にそこに到着した。

彼が来ると聞くと、兄弟たちは競って出迎え、喜んで彼を住居に連れていった。建てられていた礼拝堂で祈った後に扉の前に出た。兄弟たちに短く話しかけ、ミサを行うのに必要な物を用意するように命じた。その間に

手を洗いながら見回して、そこから遠くないところに、井戸から掘り出されその端の周りに円形に置かれた土の山に気付いた。そのため、これを何に使うのかを尋ねた。それから、彼らは自分たちが掘った井戸を見せて、いかにこの無駄な作業に長い時間汗を流したのかを語った。

しかし、エティエンヌはこれほど必要な作業をこれほど早く成果もなく放棄したと彼らを非難し、すぐに人夫たちを呼び戻し、井戸に送るように命じた。水を見つけるまで掘るように命令した。これ以上何を言うべきだろうか。彼はミサを始め、それを終える前に、彼らは手と聖杯を洗うために新鮮な水を井戸から持ってきた。それから、時課が終わると、食堂に入り、祝福するために全員にこの水を与えるように命じた。

甘く尽きることのない水に満ちたこの井戸は今日まで残っている。

34. かつてリモージュ市に行ったとき、エティエンヌは旅の途中にある町に着いた。そこである貴族の女性が高熱を出していた。リモージュに同じ病に罹った娘がいた。娘を訪れたかったが、病気のために、あるいは野蛮な者たちの襲撃のために、そこに行く勇気がなかった。神の人がここを通ると聞いて、すぐにベッドを出て、疲れた体で息を切らせて旅の一行に加わった。兄弟たちは女性と同伴はできないため、兄弟たちが見えるように、彼女は連れとともに後ろに離れて馬に乗った。しばらく旅路を進めると、病気の重みに耐えられなくなり、馬から地面に降り、騎士の胸で少し休んだ。その後、聖なる人が振り返ると、彼女の姿が見えなかったので、途中で何か不運が彼女を襲ったのではないかと恐れて、仲間に入れなかったことを後悔し始めた。しかし、彼女はお付きの少年の一人に追いかけるように命じ、自分のことを待つか、あるいは、祝福のしるしとして彼の持ち物から何かを送るかするように頼んだ。

兄弟たちは少年が走ってくるのを見て、しばらく立ち止まり、女性が死亡したか、死にそうであると考えた。しかし、事態をより明瞭に把握すると、神の人が命じてふさわしい場所に出かけ、そこで馬を寛がせて女性を

待った。

少し経って彼女が到着すると、直ちに地面に倒れた。非常に弱っていたため、間もなく息を引き取るかと思われた。聖なる人が彼女を見にきて状態を尋ねると、彼女は返事すらできなかった。唇を閉じて、死のうとしている自分を助けてくれるように、あるいはもし出発することを決めたのならば、持ち物の一つを自分に投げつけるように頼んだ。それで、彼女の頭に手を置いて、身につけていた羊毛の帯を彼女に与えて、兄弟たちとともに彼女のために祈りを捧げた。これが終わると、彼らは慣習に従ってこの時の時課を歌唱した。これを終えるとすぐにこの女性はすっかり回復したので自分で馬に乗り、健康に感謝して、幸福に旅を終えた。以前はかるうじてついてきた人が今やはるか先を進み、神の人の帯を健康の回復のしるしとして持ち帰ったのである。

35. 聞くところによると、別の時に、この都市で教会会議が開かれ、エティエンヌ自身そこに出席したが、エブルという名のトゥル修道院の院長が⁵⁾、極めて不当に彼に対して争いを起こした。この院長はそこにいた全員の前で彼を激しく脅し始めた。神の人が優しい言葉で返答し、慎重かつ適切に不当な非難に反論すると、世俗の権力の高慢さで膨れ上がって、激しい怒りに燃えた。彼に対してあれこれのこを行うと脅したので、この行いのうわさが全リモージュに広まった。しかし、神の人はまったく脅しを恐れず、大きな自信で武装し、「強き主よ、明日のことを誇るな。一日のうちに何が生まれるのか知らないのだから」(箴 27 : 1) と答えたと言う。このように言い争ったが、友人たちが間に入り、落ち着いて、お互いに立ち去った。

翌日の夜に都市で叫び声と喚き声が上がった。至るところから鐘が鳴り、前述の院長が突然死んだことが知らされた。毒を飲んで死んだように見えたが、先に述べた争いに居合わせた全員が、神の人の言葉が——彼は大きいに嘆いたが——これほど早く実現し、受けた被害からすぐに解放され

たことに驚いた。

36. 世俗の人物との会話において彼はとても効果的で機知に富んでいた
ので、誰かが不当に彼を非難し、暴力的に攻撃したならば、その者は直ち
にこうした言葉で反撃され、混乱して顔を赤らめ、他の者たちは驚き、彼
の言葉をまるでことわざのようにみなした。

私たちが定着する場所がその所領にある、副伯アルシャンボーが⁶⁾、い
くつかの理由から激しく言い争い、粗野でほとんど侮辱的な言葉を投げつ
けた。その時、エティエンヌは、自分はこのように扱われるべきでない、
あなたはすべての借地人よりも力があるが、領地の全体で自分ほど正直な
農民はいないと言って相手をうろたえさせた。このように聖なる人はまる
で自贖したようであったが、自分を農民や村人にたとえることで実は謙遜
したのであった。彼は比類のない徳ゆえに諸侯や貴族の誰もが比べられよ
うとは思わない人であった。そのため、前述の副伯は彼の聖性を無類のも
のとして愛し、恐れていたが、このようにひどくやり込められて、ますま
す愛することになった。

37. 用事のために裁判に出席したときに同じようなことが起こった。裁
判で反対側にいた人は裁判人か代訴人に選定された人物であり、雄弁で、
富を鼻にかけて増長していたが、盲目であった。不当な裁きを神の人に対
して下したとき、エティエンヌはためらうことなく「友よ、こうして彼は
見えない者を叩くのだ」と世間で用いられることわざで返答した。この言
葉に黙らされ、馬鹿にされ、非常に困惑させられたので、彼はこの裁判で
他に何も言おうとしなかった。不当な裁きの虚偽とともに盲目が非難され
た。しかし、その後、彼はこの言葉に感化され、あるいはむしろ神への畏
れにより痛悔し、私たちの修道院の修道士となり、そこで生涯の最期まで
多くの人々に賞賛されながら立派に成し遂げた。

神の慈悲は悪を行った者を非難や叱責を通じて自らに立ち返らせるもの
であり、自発的に立ち返ることを望まない者は侮辱によって挑発され、正

義の道に戻される。

38. かつて私たちの修道院の修道士になり、後に悪魔に唆されて以前の行動に戻ってしまったある騎士の若者を見たことを私は覚えている。

ある日、多くの騎士たちの前で馬に乗ろうとし、高慢にも武器とともに馬を自分の前で見せびらかすように命じた。そこにいた全員の前で直ちに若い従者が深くおじぎをし、「祝福あれ」と答えた。このようにして、かつて自分が何であったか、そして今こうしたことを決してすべきではないことを遠回しに彼に思い起こさせた。

この返答に信じられないほど狼狽、困惑したが、実は有益な警告を受け、すぐに人々の目から逃れた。夜に起きて、傲慢にも立ち去った元にした場所へ謙虚に罰を受けて戻った。

39. さらに、この聖なる人がどれほどの配慮と注意を払って修道院の中だけではなく、地域全体の平和のために見守っていたのかは、以下の例を通じて日の光よりも明らかなだろう。ある時、トゥレンヌ副伯レイモンとギヨームという名の他の傑出した人物の間に紛争が起こった⁷⁾。この争いの原因は、このギヨームが副伯の逃げた鷹を捕らえ、傲慢にも副伯に返すことを拒んだことにあった。実際、悪魔が些細なことを通じて大きな災いを起こそうと、重大なことを通じて起こそうと妨げとなるものは何もない。

したがって、副伯は鷹が盗まれたことを、喪失だけではなく、彼が受けた侮辱も含めて悲しく耐えた。彼は戦争を宣言し、鷹がすぐに自分に返されなければ、強奪者の権利に属するすべてのものを破壊すると脅して予告した。小さな土地ではなく地域のほとんど全体が、紛争の当事者にとってだけでなく、至るところから援助に駆けつける者たちにとっても、この破壊により荒廃したであろう。

しかし、このギヨームは鷹をますます捕らえて離さなかった。この機会に副伯の肥沃な土地を侵し、不意にすべてを破壊するために戦争を欲していたのである。どうにかして鷹が盗まれ、戦争の機会が失われることを恐

れて、彼は遠くに居住する有力者にそれを苦勞して託した。この男も同じくらい戦争に燃え、略奪もより熱心に渴望していた。

聖なる人は悪行が増大していることを理解した。略奪を行う武装した戦士にすべてが占められ、日々悪行が数を増したのである。彼はこれほどの禍に立ち向かうことを厭わなかった。まず、副伯のところへ行き、なぜ小さな鳥のために多くのキリスト教徒の住民を苦しめ、損なうのかと彼を叱責した。それから、悪行に赦しが与えられるように、あるいは少なくとも、損害が無実の住民ではなく、強奪者だけに加えられるように懇願した。しかし、このやり方では何も結果が得られなかったので、尊敬すべき人は唯一可能だった別の方法を試した。集まっている軍隊が解散し、自らのところに戻るならば、自分が鷹を返すと約束したのだった。

副伯がこれに同意すると、直ちに信仰で武装し、「若獅子のように自信に満ちて」（箴 28：1）、副伯の権威と同様に自らの権威により軍の戦列に入り込み、密集している兵を分離し、全員を自らのところへ戻らせた。次いで、前述のギヨームのところへ向かい、確かに彼のところに鷹がないことを知ると直ちに、冬の厳しさと旅の長さが妨げとなったが、鷹が託された男のところへ進んだ。平和のためならば彼にとって過酷なことや困難なことは何もなかった。祖国が破壊されないように死を覚悟していたからである。

ついに男がいる城に到着したとき、この男はエティエンヌを見て、何を望み、何のために来たのかをすぐに理解した。それで、激怒し、彼のために何もしなかったばかりか、侮辱して門から遠ざかるように命じた。

彼はこれに我慢強く耐えた。夜になると、何も食べずに、伴っていた兄弟たちとともにこの町から遠くない貧者の小屋へ向かった。この貧者には妻とまだ幼い子供たちがいたが、子供たちは裸で手足がほとんど隠れていなかった。彼らの惨めさを憐れんで、朝に出発するときに、密かに上衣を脱ぎ、他の人々に気付かれずに、まるで忘れたかのようにそこに置いて

いった。しかし、兄弟たちは彼が寒さに苦しみ、肩が震えるのを見ると、上衣をすべて持っているかどうかを彼に尋ねた。彼は事態を明らかにしたくなく、嘘もつきたくなかったので、「持っているすべての上衣でもこの激しい寒さは逃れられない」と述べた。

兄弟たちは修道院に戻ることを望んだが、彼は前述の町に向かった。とりわけ彼らを侮辱して追放した男に対してどのようにすべきかを仲間たちは議論した。エティエンヌは「さあ、神の名において行こう。今日の彼は昨日の彼ではないだろう」と予言的な言葉で彼らに答えた。

再び城に到着して、以前に彼らに閉ざされていたすべてが開かれていることに気付いた。彼らを追放したあの男は神の人が再び自分のところにやってくるのを見て、すぐにベッドから飛び出て、裸足で全身もほとんど裸の姿で、雪の積もった庭で彼のもとへ駆けつけた。エティエンヌの足元に彼は平伏し、侮辱を加えたことの赦しを請い求めた。赦しを得るとすぐに、盗まれた鷹を神の僕の手渡し、しばらく一緒に歩き、幸せに送り出した。こうして聖なる人は受け取った鷹を運ぶのをある兄弟に託して、幸せに帰り始めた。地域全体の平和が一羽の鳥にかかっているのを見るのは驚きであった。それから、鷹はトゥレンヌの城に運ばれたが、放されるとすぐに副伯の宮廷に飛んで行った。鷹がいなくなると奪われた平和が、鷹が戻ると回復した。このように前から着手されていた平和が完成し、すべての土地が破壊と荒廃から完全に解放されたのであった。

40. エメリックという名の非常に敬虔な兄弟はいつも聖人に付き従った。エティエンヌはある用事で彼を旅に送った。一日のかなりの時間を騎乗で過ごしたので、家畜を休ませたいと思い、いつものように、しばらく徒歩で旅をするために地面に降りた。その時、乗っていた家畜は解放されたとわかると、ラバの習性であるが、突然、逃げ出し、平野や道なき場所を駆け始めた。従者の少年は行くのを阻止しようと努め、道をできるだけ走った。彼らが皆何もできず、ラバは遠くに行ってしまったので兄弟は少

年を呼び戻した。走ったことで興奮してラバがますます逃げて、もう捕らえられなくなることを恐れた。

それで、誰の姿も見えず、ラバが走り止まないで兄弟は絶望し、ラバのほうを向いて「従属の徳と我らが父の功德により、これ以上進まず、私を待つようにお前に命じる。私は疲れた」と言った。この声を聞いて、遠くにいたが、ラバは立ち止まり、頭を兄弟に向け、兄弟がやってきて手綱で捕らえるまで頭を逸らさず、動かなかった。それから、少年のほうを向いて「服従の徳はなんと素晴らしいのだろう。物言わぬ動物でさえ尊重するのだから」と言った。

41. 『聖コロンバヌス伝』においてある人について書かれているように⁸⁾、他の兄弟がワインを汲み出そうとし、樽を開け、容器を置き、そこにワインが流れるようにした。このようにしている間に、別の兄弟が突然やってきて、院長のために彼を呼んだ。服従に燃えて、ワインを置いて、ワインを留める栓を手にとって、父のところへ急いで進んだ。父が彼に望むことを命じたとき、放棄した仕事のことを思い出した。ワインがすべて流れ出たと考えて、樽に急いで戻った。しかし、戻ったところ、樽がいつも以上に満杯であり、実はあり余っていることに気付いた。中のワインはまだ流れ出ていたが、一滴も地面に落ちることはなかった。聖人の徳と兄弟の服従によりこれがなされたことを疑う者はいなかった。ワインの係の者はジェローという名で「忠実で賢い」(マタイ 24:45) 者であった。この者の真実の話から私たちはこれが起こったことを知った。

42. 聖人がかつて司祭の職を務めていたプロの村に⁹⁾、二人の女性が一つの住まいに一緒に暮らしていた。そのうちの一人はレプラ患者であり、もう一人は麻痺を患い、長年ベッドから起き上がることも移動することもできなかった。祝福された人は、マルタとマリアについて読まれるように、この二人を非常に愛し、この村に行くときはいつもそこから帰る前に彼女たちを訪問した。これはそれなりの価値があった。一人はマリアのように

何もできないのでイエスの足元に熱心に身を委ね、もう一人はマルタのようにあちこちを歩き回り、自分と仲間のためにどんな施しでもできるだけ手に入れた。実際、彼女はキリストに熱心に奉仕した。

聖なる人が旅の必要でこの村に来ることがあった。ミサを執り行う準備をしていると、使者が司祭たちのところに来て、麻痺を患う女性は、しばらく前に熱に襲われ、危篤の状態最後の秘跡を求めていると伝えた。これを聞いて、自分がミサを終えた後に喜んでこの女性に聖体拝領をすると司祭たちに言った。司祭たちの求めでこれを敬虔に行うと、すぐにこの村を出た。しばらく歩くと、前述の女性は突然に熱だけでなく麻痺も治癒し、この日のうちにベッドから起き上がり、教会に行き、それから何年も無事であった。賞賛の拍手を避けるために、聖なる人は村から立ち去るまで彼女の治癒が遅れることを願っていたと私は思う。

43. かつてこの聖なる人がシトーの集会に行ったとき、異なる病気に冒された二人の少年が彼の前に連れてこられた。彼らのうちの一人は、畑で口を開けて寝ていると蛇が腹の中に入り、ひどい引き続く痛みで苦しんだ。もう一人は、誰とも一緒に食事できないので苦しんでいた。実際、彼は食べることを求められなかったので、彼の両親は遠い場所に彼を送り、そこで一人で野獣のように欲しい食事ではなく必要な食事をとるようにさせた。見た目や服装、話し方や動きの点で彼は狂人のように見えたので、彼を見る者は誰でも一目で正気を失っていることを疑わなかった。

この二人は異なる時にグランギアで神の人の前に連れてこられた。彼は蛇が腹にいる者を長い間受け入れることを拒んだが、ついに兄弟たちに強いられ、離れて立つように命じた。彼のために祈った後、悪魔祓いされ、塩をまかれた水を祝福し、飲むように与えた。これを飲むと蛇は死に、便所で排出され、それとともに病人の身体からすべての苦痛が追い出された。

狂人が両親に連れてこられたときは、祈りと按摩だけで治癒され、その

時もその後も他の人々がいて見ているところで食べ、すべての行動で正気を失ったところをもう見せることはなかった。

44. まだ若い少女である聖なる乙女の一人は、尋常でない病により眼の光を失い、そのため、必要なときには他の人の手に導かれていた。見えなくなった両目が突然に膨れて、外に出始めたので眼窩から引き離れそうに見えた。

彼女はこのひどい痛みに苦しみ、他の姉妹たちは彼女の年齢と苦しみを慮って泣き出した。しかし、神の人が慣習に従って姉妹たちを訪れるために窓のところに来たことがあった。彼が来ることを知ると、前述の少女を彼のところに連れていき、窓の傍らに近づけた。エティエンヌがこの子供に対してどうして欲しいのかを彼女たちに尋ねると、彼女の病気のすべての症状を彼に入念に打ち明けた。そうすれば、神が彼女に健康を与えてくださると信じて、彼女の目の上に手を置くように懇願した。

その時、神の人は、自分が手を置くと視力が回復すると信じるかどうかを少女に尋ねた。3度尋ねると、3度答えた。「私は信じます」と。すぐに窓から手を入れて、祈り、目と頭全体に十字架のしるしを描き、触れ、祝福し、健康になって立ち去るように命じた。間もなく、他の人々の手で運ばれてきた彼女が自分で立ち上がった。修道院の門扉に到達したときに、彼女の目は開き、すべての苦痛が腫れとともに直ちに追い払われた。

彼女の目がはっきりと見え、以前の病の跡が何も残っていないのを姉妹たちは見て、喜びでいっそう泣き、聖人の徳と少女の健康に対して神を賛美した。

45. 豊かな知恵を授けられたサムエルとダニエルのように神の御前に立つように、神の人は少年たちに神の法を教えていた¹⁰⁾。医者が治療は不可能だと言う重い病がこの少年たちを襲ったことがあった。彼らの首と開いた咽喉は非常に腫れて膨れ上がったので頭と同じくらいの並外れた太さに見えた。少年たちが絶望していると、聖なる父が彼らの苦しみを知らず

に訪問しにやってきた。これほど悲惨な病気に罹っているのを見て、非常に嘆き、涙を流した。彼らのために長い間何度も神に祈った後に、密かに自分のところに連れてこさせた。祈りの薬を処方した後にそれぞれの首、咽喉、他の病んだ場所に触れた。目を天上に向け、キリストの名を呼び、救いをもたらす聖なる十字架を押し当ててしるしをした。これ以上何をぐずぐず語るべきだろうか。全員を完全に治癒したので、3日目までに以前の病気のいかなる痕跡も残っていなかった。

46. 少年たちの別の一人はもう修練期間にあったが、咽喉の膨らみと咽頭の腫れとともに、首の辺りを腫れと膿瘍に冒され、横になったり、寝たり、頭の向きを変えたり、食事をとったりすることができなかった。激しい苦痛に悩まされて、彼自身休むことができず、他の人々に休ませることもできなかったのでどうしたらいいのかわからなかった。しかし、聖なる父はいつものように彼とその仲間たちを訪れると、彼の痛みと激しい苦しみを見て、彼を脇に連れていった。天上に目を向けて、いつものように祈り、健康をもたらすようにすべての患部に触れると、直ちにその日のうちに少年は食事をとり、翌晩とその後は十分に寝ることができた。

47. 子供たちについて述べているので、彼らがどれほど純粋に育てられ、あらゆる世間知の抜け目のなさからどれほど遠いかがわかる彼らの無垢な例を挙げてもおかしく見えないだろう。

ある少年は女性のための修道院で母親に育てられた。5歳を超えると、この年を超えてそこに留まることは許されないの、そこから追い出され、上述の施設の少年用の住居に送られた。

途中で、女性たちはどのようにしているかと彼を連れていた兄弟に尋ねられた。その中で育てられたわけであるが、彼は女性を見たことがないと答えた。兄弟が尋ねている人々は、女性ではなく姉妹であると思っていたからである。彼女たちがいつもそのように呼ばれていることを知っていたのだ。彼がこのように答えたのは無垢からなのか比喩的な意味なのかを確

かめたくて、「それでは、本当に女性を見てみたいか」と彼に再び尋ねた。「見たい」と少年は言った。遠くに草を食む雌山羊を見て「見なさい、あれが女性だよ」と言った。

これを聞き、聞いた通りに信じた。同年代の少年たちのところに着くと、中でも野で草を食む女性たちを見たとき自慢し始めた。もっと無垢な少年たちは驚き、女性のことをより正確に知っていた他の少年たちは笑ったが、彼らがより幸運なわけではなかった。

48. 別の養育所の少年が牧草地から青々とした干し草を運ぶように所長によって送られた。召使いたちがロバに荷を載せたが、このロバは帰りに両側のせまった長い道を通り過ぎた。両側の土手に引っかかって荷が軽くなり、ロバはこっそり逃げて家に戻ったが、少年は気付かなかった。少年は干し草の脇に立ち、何度もこれを叩き、脅した。彼を探しに出発した兄弟たちが、ロバはもう戻ってしまい、干し草は運ばないと動かないということをついに説得するまでこの場を動かなかった。

49. これがこの少年たちの聖なる純朴さ、無垢な純粋さであった。こうしてこの世の不純な悪知恵を何も持たなかったために、神の認識と天使の純粋に真に近づいた。

しかし、私たちの時代の子供たちは話せるようになるとすぐに、この世で知らないことはほとんどなくなり、彼らが話すのを聞くと、市場の人間のように考えるだろう。生涯の最初の時期を世俗的な関心に捧げた彼らにそれほど神の事柄に通じる能力があると信じないほうがよい。私たちが述べた子供たちは人の事柄では愚かに見えたが、神の事柄ではそれほど愚かではなかった。こうした者たちについて使徒は「悪事については幼子となり、物の判断については大人になってください」(一コリ 14 : 20) と述べた。そしてまた「善にさとく、悪には疎くあることを望みます」(ロマ 16 : 19) と述べた。

彼らの中の賢く、非常に聖なる少年が死に瀕してベッドに横たわってい

たとき、共通の父であるエティエンヌが尊敬すべき所長と他の聖なる兄弟たちとともに彼の側に立っていたが、少年はまだ最後の息を引き取っていなかった。彼らの間で霊的な事柄について話し合っていると、詩編の素晴らしさについて論争が起きた。彼らは賞賛し、大いに称揚してその価値を讃えたが、そのうちの一人が詩編には呪詛が含まれていないが、神の祝福に溢れていると発言した。その時、ほとんど瀕死と思われたが、尊敬すべき少年は息を吹き返し、「そうではありません。そうではありません、私の主たちよ。詩編には大いなる呪詛が含まれています」と言った。全員が啞然として立ち尽くし、聖なる父が所長とともに「どこに呪詛があるのか、息子よ」と彼に言った。「あなたの戒めから迷い出る者たちは呪われるべきです」(詩 118:21) と彼は答えた。この純粋で適切で確かで決然とした返答に驚いて感動し、もう意識がなく話せないと思っていた無垢でほとんど瀕死の少年に自分たちが敗北したことを祝賀しながら恥ずかしさで顔を赤らめた。

しかし、こうしたすべてについてエティエンヌが認められるべきである。キリストにおいてこのような息子たちをもうけ、知恵の学問を教えたことで、神の次に彼が称えられなければならない。こうした点で彼の徳の像は鏡のように輝き、彼は預言者とともに「見よ、わたしと、主がわたしにゆだねられた子らを」と言うことができるだろう。

50. 白状すると、彼の顔は平凡でありふれていてしわが寄ってさえいたが、誰の顔にもこれほどの恩寵が輝くのを見たことはない。乾燥した土地がわずかな作物の収穫しか生み出さないように、節制のために彼の髪は薄くなった。人の顔の優美さを与えるすべてが彼には欠けていたが、内側の光で輝いていたので、彼の顔を見飽きることはなかった。このために多くの人は彼を注意深く見た。話すだけでなく通りすがりに何かをすることで見ている者を教育したので、彼のすべての身振りや何をどのように話しているのかに人々は熱心に注意した。世俗の貴族や賢明な人々が、修道生活

に関することを除いて、これほど品があり、用心深く、賢明で、正直で、万事に周到な人を見たことがないと執拗に述べた。また、人間関係の洗練を飾り、内的な生活の榮譽を増すものが彼には欠けていなかった。

物事が自ら示したり、機会が許したりするときにはいつも、彼は唇を閉じて少し微笑み、すぐに鳩のように聖なる肩を振った。それで、あなたはこれより純朴なものを見たことがないと考え、そして、これより恐ろしいものを見たことがないと思って、怒っている姿を見たときに劣らない恐怖を感じるだろう。もしこの時に彼が目の光線をあなたに向けたならば、全身に侵入したように考え、心臓の隠れた部分が彼にいくらかさらされているように思え、彼の視線から隠れるものは何もないだろう。彼を笑う者はほとんどなく、怒っているときと同じぐらい微笑んでいるときの彼を恐れた。これはヨブが自らについて「私が彼ら（すなわち召使いたち）に笑顔を向けても、彼らは信じず、私の顔の光は地上に落ちなかった」（ヨブ 29：24）と述べたことである。実際に、ふさわしい合理的な理由なく喜びの手綱を決して緩めなかったので、彼の顔の光が地上に落ちることはなかった。

これは傲慢さではなく、福音書において主が「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」（マタイ 10：16）と言って勧めた賢明な純朴さであった。実際、賢明な人のようにエティエンヌはすべてに賢く備え、素朴な人のようにすべてを信じた。何も軽蔑せず、すべてを望み、すべてを愛し、すべてに耐えた（一コリ 13：7 参照）。

51. さらに、彼はすべての兄弟たちに愛情をもって恐れられ、恐れをもって愛されたが、多くの者がするように、傲慢にも彼らの上に自分を置くことは決してなかった。権威というよりもむしろ愛により彼らを治め、彼らに奉仕し、神の命令により福音書に書かれていること、すなわち、「あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい」（ルカ 22：26）ということを実現

した。ある賢者も「お前を長にしたわけではない。有頂天になるな。彼らの一人として、皆と同じようにふるまえ」(シラ 31 : 1) と言って注意した。

もし神への愛のために何か慣習を超えたものを与えたいときは、エティエンヌは施与の係たちがいないときに隠れて行った。彼らを恐れたからではなく、つまずかせたくなかったからである。「目が見ないものは心を悲しませない」という世俗のことわざの通りに、彼らが知らないようにしたのではなく、見ないようにしたのである。自分の財産から何を与えられたのかを冷静に見ることができない者がいるからである。したがって、聖人は係の者たちが存在するとき、あるいは不在のときに多くを与えたが、不在のときには上述のやり方で、存在するときには命じるのではなく懇願した。彼らを悲しませないように、そして乞う者たちに必要とするものを拒むことがないように慎重かつ驚くべき周到さでこれを行った。この件でこれまで彼に反対した者はいないが、なぜ聖人が自分に属するものを自分の判断ではなく他人の許可によって与えるのかと非難した。彼は修道院の財産の何も自分のものだとは主張しないし、それゆえ、共同の同意なく共同財産から何も与えられるべきではないと答えた。さらに、罪を免れ、正義の聖性と生涯の高潔さを備え、すべてについて服従し、決して反抗的でないときには、彼はこうした敬意を管理の係や施与の係だけでなく、他の使用人たちにも保った。しかし、もし責められるべきで、傲慢に思い上がっているとみなしたならば、彼らを容赦することなく、直ちに厳しい師、怒りの主として彼らの背中に罰を与えると脅した。職の権威で高い地位を占める者が懲罰を免れるわけではないので、下の者にこうした措置を求めたのではなく、まず上の者から始めた。昨日偉大なコンスルのようにすべてを定めていた者、彼の支配にすべてが属する者が、今日は罪が求めるところに従って、鞭で打たれ、叱責を受け、重い罪で引き渡され、地面に投げ落とされるの見るのは驚きであった。述べたように彼を完全に破滅させ、地面にまで卑しめ、しばらくして苦しみが和らぐと、以前の信望を再び与

えた。以前のように彼の管理と決断にすべてを委ね、いつものように彼を敬い、いわば恐れ、彼の助言なしに何も行ったり、命じたりしないようにした。この点で確かに彼は下の者に対して賢い医師の熱意を模倣した。まず、危険な腫瘍を厳しく切開し、傷を優しく看護し、元気づけ、微笑む幸運で彼らが増長せず、迫りくる逆境で彼らが過度に苦しまないようにした。こうして名誉が与えられたからといっていくらか容赦されることはないこと、罰が課されたからといって以前の信望から何も減らされるわけではないことを彼らは知った。しかし、この点で下の者にも劣らずに配慮した。全員に等しく脅威に見えるものに耐えられないと決して考えないように、確かに上の者に飲ませる前に鞭と苦難の聖杯を彼らに飲ませなかった。

52. 兄弟たち全員に挨拶をした後に、旅に出かけようとするときは、病人たちの祈りに身を捧げた。遠くに旅立つときは、彼らを悲しみと涙のうちに置いていった。悪い主が旅立つときは喜びがあり、帰ってきたときには悲しみがある一方、善き主は旅立つときに悲しみを残していき、ようやく帰ってきたときは悲しみが喜びへと変わる。彼が出発するときは全員が悲しみ、戻ったときには全員が内も外も喜んだ。よく言うように、壁自体が彼の帰還になんらかの仕方で感謝し、快活になるようだった。

さらに、すぐに助言を得るために、そして自分の瘦せた平凡な外見が比較してより貧弱に見えるように、見た目が誠実で尊敬すべき人物たちを連れていった。旅の途上で、羊飼いや子供たちに彼らのうちの誰が院長かを尋ねると、上品な顔が賞賛された他の者たちをさしおいて、全員が競って彼のところへ走った。彼が院長であり、全員の父であり教師であると、言わば、予言的な声で宣言し、彼に施しを期待し、求めたが、無駄になることはなかった。

53. だから、グランギアや彼の権限の下にある他の場所に来たときに、すべての管理が彼に属しているのだから、いかにすべてを調べ、至るとこ

ろを歩き回り、訪れない場所を残さなかったかを誰が報告できるだろうか。馬を降りるとすぐに、スカプラリオを着用し、修道院やグランギアのすべての場所や建物を精力的に歩き回り、もし何かふさわしくないものを見つけたら、兄弟たちを呼び、叱責した後に、発見された怠慢が直ちに矯正されるように命じた。

何かなされるべきならば、彼自身が鍬か何かの道具をとり、作業を始め、すでに始めたことを成し遂げ、他の人々を仕事に招いた。もしその時に穀物が脱穀されていたならば、すぐにその場所に集まり、一緒に来た仲間たちとともにそこで長い間脱穀をした。

怠けて働かないのに食料をもらわないように、乗ってきたラバが休むことを許さなかったのだから、彼と彼の仲間たちについては何を言うべきだろうか。遠くで労働したり、牧草地に留まったりしている兄弟たちをすばやく訪問しに行き、どのように各人がその立場や仕事で行動するかを注意深く尋ね、必要に応じて一人一人を助け、教えた。農作業で彼が知らないことはなく、何かを教えたり、正したり、改善したりできないような種類の技術や活動はなかった。様々な健康状態や性質に応じて兄弟たちは、内でも外でも遠くでも近くでも、様々な労働に位置を占めた。彼はすべての兄弟のもとへ適切に駆けつけ、怠ける者を厳しく叱責し、疑う者を励まし、臆病な者を強くし、嘆いている者を慰め、悲しんでいる者をなだめ、疲れ果てた者を元気づけ、渋る者を休ませた。さらに、熱心で労働に最も適した者がある時は過剰な熱意から呼び戻し、ある時は喜ばしい言葉をかけて働くように励ました。虚栄と怠慢はお互いに反対のものであり、どちらも悪徳であるが、悪を減らすならば、怠慢の罪を犯して「主が課せられた務めをおろそかにする者は呪われよ」(エレ 48：10) という予言的な呪詛を招くよりも、虚栄心からの何らかの行為を懲罰するほうがましだと思った。こうして特に若者についてあらゆる怠慢と怠惰を追及したが、犯罪行為を別にすれば、悪徳の中でこれ以上に重大なものはないと主張していた

からである。

もしポーチや他の場所を歩き回り、野菜や豆が不注意で地面に落ちて散らばっているのを見つけたならば、すぐに腰をかがめ、どれほどわずかでも一つ一つ拾い集めた。落とした罪がある者たちを呼び集めて、怠慢に関して彼らを厳しく咎めた。

もし客人を連れてきたり、たまたま彼がいるときにやってきたりしたときは、グランギアでも修道院でも台所に入り、何をどれだけ彼らに給仕すべきか、何を貧者たちに残すことができるかに非常に配慮して世話をした。用意が少な過ぎたり、多過ぎたりしないように、吝嗇にも浪費にも見えないように行った。

外的で小さな事柄について何かが怠慢により不必要に失われることがないようにこれほどの配慮をしたのならば、道徳の誠実さや魂の救いに関する事柄について彼がどれほどの注意を向けたと考えるだろうか。いったい誰が彼の前で不適切に手や足を持ち上げたり、あつかましく目を上げたり、無礼な言葉を発したり、無駄な身振りをしたりするだろうか、ましてや卑劣な言葉を浴びせたり、大笑いして口を開けたりするだろうか。

54. したがって、小さな軽い罪でも非常に厳しく裁いたのだから、重罪をどれほど厳しく罰したのかは十分にわかるだろう。しかし、ほとんどの場合は、前にも後にも罰を与えず、何らかの違反を恐怖のみで矯正した。このことは以下の例から明らかになるだろう。

ある土曜日に終課の後にいつものように歩き回ったとき、週の労働を終えてパン焼き所でパン焼き係たちがいつもより陽気に、木を手にとって槍のようにして戦い合っているのを見た。これを穴から覗いたが、彼らからは完全に見えなかったので、彼らに気付かれないようにのどの音を鳴らし、通り過ぎた。大変な恐怖に陥ったので、彼らの一人はこの後の尋問の圧力に耐えられずにすぐに逃げる用意をしたが、仲間の兄弟によって辛うじて苦勞の末に引き留められた。

翌日に集会室に来て、非難を待たずに、それぞれに赦しを求めた。裁きの間は黙って立ち、聖人にどのような理由があるのかを尋ねられると、「ご承知の通りです」とだけ答えた。彼は腹を立てている様子で、行って座るように彼らに命じた。前の晩に彼らにどれほどの恐怖を引き起こしたのかわっていたからでないとする、彼らをこれ以上非難しなかったのはどういうことだろうか。彼は多くの者がするように苦痛に苦痛を加えることを望まなかった。そうした者たちは下の者が恐れれば恐れるほどますます激しく脅すが、それはますます罪深いからではなく、だんだん恐れなくなるからである。

55. 卓越した者たちの一人である他の兄弟が集会の際に厳しく鞭で打たれた。その後、悲しみに沈み、つらい気持ちで外に一人座っていると、聖なる人が彼を見つけ、なぐさめたいと思い、わざと彼の前を通り過ぎ始めた。気が進まなかったが、自分の前を通り過ぎるのに付き従わないわけにはいかないので、立ち上がり、進み出た。聖人は彼のほうを向いて「おそらくは和解するために私の後をついてくるのだろう」と言った。「違います。私と遠い考えです。そのようには考えておりません」とこれに答えた。すぐに彼の首をつかみ、固く抱きしめ、キスをした。この兄弟の心は喜びに変わり、直ちに地面に身を伏し、聖人の足を抱擁し、涙を流して彼に怒っていたことの赦しを乞うた。

注

- 1) 2 卷 22 章参照。
- 2) Gregorius Magnus, *Dialogi, libri II, De Vita et miraculis sancti Benedicti*, ed. J.-P., Migne, P. L., LXVI, 154 に似た話がある。
- 3) 2 卷 22 章と 27 章参照。
- 4) バニエール (Banière) のグランギアのこと。
- 5) レイモン 2 世の兄弟のエブル・ド・トゥレンヌ (Eble de Turenne) のこと。
- 6) アルシャンボー・ド・コンボルン (Archambaud V de Comborn) のこと。
- 7) 1143 年にレイモン 2 世はトゥレンヌ副伯として父のボゾンの後を継いだ。

- 8) Jonas de Bobbio, *Vita S. Columbani abbatis*, ed. J.-P., Migne, *P. L.*, LXXXVII, 1026.
- 9) プロ（Pleaux）については、1巻1章註15参照。
- 10) シトー派は成人の回心を重視し、伝統的な奉獻児童は受け入れなかった。オバジーヌのシトー会加入の際に総会で共同体内の女性の存在が問題になったが（2巻12章参照）、子供の実存も問題含みであった。加入以前に両親とともに修道院に入った子供たちを養育する必要があり、そのための複数の養育所（*stationes puerorum*）が離れた場所に存在していた（2巻47章・48章参照）。5歳までコワルー修道院で母親により育てられ、女子はそのまま留まり、男子は養育所に移された（2巻47章参照）。この場所は *cella* と呼ばれ、所長（*prior*）が管理し、兄弟たちが補佐した。ドルドーニュ川の辺の養育所には聖堂と回廊が付属していた（2巻30章）。

